

ホットラインの電話が鳴った。高速道路で大型バスが横転、けが人多数、レスキュー隊が救出中との一報だ。病院長は直ちに災害対策本部を設置した。緊急速結で医師、看護師、事務員らが外来に集結、玄関ホールを区域に分け人員を配置していく。けが人に最初に接触する振り分けエリア、生命の危機



四国健康
七
徳島大病院ER・災害医療診療部
今中 秀光 特任教授

のあるけが人を治療する赤色エリアではすでに怒号が飛びかう。移送用ベッド、資器材が続々運び込まれ、黄、緑、黒、各エリアの緊張が高まる。数分後、救急車が列をなして到着した……。

これは、昨年の災害対策訓練のあらすじです。災害は大型交通事故・爆発事故などの人為災害、台風・地震などの自然災害に分けられます。どんな災害がいつ起きるか予測できません。しかし想定外が少しでも減るよう徳島大学病院は準備を進めています。

「いい、皆さんにお願いがあ

ります。ご自身の過去の病気、飲んでいるお薬リストを避難用物品の中に入れておきましょう。万が一避難することになった際、この情報はとても助かります。災害医療では突然同時に多数の傷病者が発生し、マシナリや資器材の不足した状況下で、いかに効率的で適切な医療を提供するかが課題となります。病気の情報、お薬リストは限られた資源の有効利用にとっても役立ちます。

想定外を減らすための災害医療訓練

徳島大学病院は災害拠点病院に指定される前から、いろいろな想定で訓練を続けています。揮発性の劇毒物が汚染されたけが人が多数発生した想定は訓練は仕舞です。駐車場に巨大な除染デントを立ち上げ、宇宙服のような防護服を着たスタッフが温水シャワーでけが人を洗浄します。一方、自然災害では病院自体が被災する可能性を考えなければなりません。避難誘導、応急救護、職員・患者の安全確認を行う訓練を繰り返しています。

ます。大規模災害時には病院間、行政機関、消防などとの連携が大切となります。これら訓練を通じて、災害医療の重要性を職員全員が実感し、レベルを向上させることを目指しています。